

# 骸骨ビルの庭

## 宮本輝

### 上



講談





講談社文庫

常州大学圖書館  
藏書之章

宮本 輝

講談社

〔著者〕宮本 輝 1947年兵庫県神戸市生まれ。追手門学院大学文学部卒。'77年『泥の河』で太宰治賞、'78年『螢川』で芥川賞、'87年『優駿』で吉川英治文学賞をそれぞれ受賞。'95年の阪神淡路大震災で自宅が倒壊。2004年『約束の冬』で芸術選奨文部科学大臣賞、'09年本作で司馬遼太郎賞をそれぞれ受賞。著書に『道頓堀川』『錦繡』『青が散る』『避暑地の猫』『ドナウの旅人』『ひとたびはポプラに臥す』『睡蓮の長いまどろみ』『焚火の終わり』『草原の椅子』『森のなかの海』『星宿海への道』『にぎやかな天地』『宮本輝全短篇』（全2巻）など。ライフワークとして「流転の海」シリーズがある。近刊に『三千枚の金貨』『三十光年の星たち』『慈雨の音——流転の海 第六部』。

がいこつ にわ  
骸骨ビルの庭(上)

みやもと てる  
宮本 輝

© Teru Miyamoto 2011

2011年12月15日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに表示してあります

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

Printed in Japan

JASRAC 出 1115088-101

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277021-7

目次

骸骨ビルの庭（上）

5



講談社文庫

# 骸骨ビルの庭(上)

宮本 輝

講談社



目次

骸骨ビルの庭（上）

5





骸骨ビルの庭（上）



私はその風変わりなビルの管理人としてすごしたのはわずか三カ月余りの期間にすぎません。

管理人といっても、それはそのビルに住居や事務所を持つ、どうにも一筋縄ではないかない連中に穏便に去ってもらい、昭和十六年十月に英国人の設計家によつて建てられた三階建ての堅牢なビルを壊すという役割を担っていました。

正しくは「杉山ビルディング」。戦後のある時期から昭和の終わりごろまでは、近隣の人々に「骸骨ビル」と呼ばれた鉄筋コンクリート造りの、階段の手摺にも広い踊り場を生かした壁の模様にも、各部屋の窓際のちよつとした飾り棚にも、古風な英国調の趣きが残るビルの一部屋を与えられた私は、持久戦に持ち込もうとしているかに見せかけるために、気弱で鈍感で無能な人間を装おつて、あえてこちらから立ち退き交渉を持ちかけず、その日その日に見たこと、感じたこと、起こつたことなどを大学ノ

ートに書きつけるのを日課としました。

あいつは俺たちを追い出しに来たのに、ビビってしまったて、自分は一日窓からアホ面を外の景色に向け、誰かの小説の書き出しとか、好きな詩の数行とか、愚にもつかない日記や身辺雑記なんかをノートに書いて時間をつぶしてやがる。やわなやつを送り込んだもんだぜ……。

そう思わせることを目論んだのですが、わざと装おわなくても、私は自分をじつは気弱で鈍感で無能な人間だと思ひ知る日々がつづいていたので。そして、骸骨ビルに居坐っている連中を揉め事なく立ち退かせることなど、私はビルにやって来た翌日にはあきらめてしまっていたのです。

私が骸骨ビルを去り、ビルそのものも姿を消して、その跡地に十二階建てのマンションが完成して十年が過ぎ、私は還暦まであと一年という年齢に達しました。

ときおり、あの三カ月のあいだに私が書きつづったさまざまなる事柄を読み返すたびに、これを誰か他の人にも読んでもらいたいという思いにかられてきました。

もとより、人に読んでもらおうと思つて書いたものではありませんし、かつて骸骨ビルで暮らした人たちのそれぞれの思い出話も、脈絡のないただどしい内容を私が少し整理して読みやすくしただけで、人さまが読むに価する文章となつているかどうかどう

か、はなはだ心許ないのです。

しかし、ことしの二月に、ナナちゃんから、茂木泰造さんが亡くなったという葉書を貰い、あのナナちゃんらしく、訃報であるにもかかわらず、笑い顔をあらわす絵文字と大きなVサインを黄色と緑色の色鉛筆で描いて、その下にさらに大きな字で「享年八十五」と付け加えられているのを見たとき、私は万感胸に迫るとい言葉以外、感情をあらわすいかなる術もない思いに浸ったのです。

やはり、私は私があこの三カ月間に書きつづったものを残しておかなければならぬ。そして、やはりそれは誰かに読んでもらいたい……。いま私は、そういう衝動にかられつづけています。

大方の人にとって、それは自分とは何の関係もない無用な記録です。けれども、ちよつとした気の迷いで、あるいは暇つぶしのつもりで流し読みを始めたなら、ついつい最後まで読み耽ってしまった、という方もあらわれるかもしれません。

そのような方のために、私はあらためて自分の書いたものを推敲すいこうしなおしてご披露することいたします。

私の日記の部分のあらかたは削除しようかとも考えたのですが、それがないと骸骨ピルで生きた人々について余計な説明文を加筆しなければならぬのではないかと思

い、あえてそのままにしたことを申し添えておきます。

平成六年二月二十日

阪急電車の十三駅じゅうさんせうから淀川に向かつて歩きだすと、JRの大阪駅の東側へとまっすぐにつづく広い道に出る。この道はそのまま御堂筋につながっているのだ。十三大橋の長い鉄橋と丈高い堤が見える。

淀川のほうから吹いてくる冷たい強風がビルとビルに挟まれた広い道に破れ鐘わに似た音を響かせている。冷たい雨が斜めに降っていて、傘が役に立たない。

道の右側には、銀行や証券会社やテナントビルが並んでいるが、その向こう側にはラブホテルの看板の居並びも見える。とにかくラブホテルと有料駐車場の多い町だなというのが十三についての私の最初の印象だ。

友人のTもSも、

「大阪のジュウソウ？ いかにも大阪だなアって感じのとこだぜ」

と口を揃えて言ったが、何がどう「いかにも大阪」なのか、私にはまだわからな  
い。夜、駅の周辺を歩けば、その意味がわかるのかもしれないと思いながら、道に止

まっていた宅配便の車の運転手に杉山ビルの場所を教えてもらおう。

淀川の堤を左に五十メートルほど行つたところだが、堤まで行つてしまわずに阪急電車の高架をくぐり、予備校のビルの裏手の道を行つたほうがわかりやすいという。目印は「エデンの仔猫」という名のラブホテルと、その隣の植込み。

十三大橋に近づくにつれて、風の音以外の奇妙な騒音で神経が疲れ始める。それがいったい何の音なのかわからないが、とにかくこれまで耳にしたことのない不快な騒音だ。けれども、近くに工事現場があるわけでもなく、道を走っている車の数も、東京の街のそれと大差はないのだ。

なぜ目印が植込みなのか、杉山ビルに辿り着くとすぐにわかつた。「エデンの仔猫」というラブホテルに隣接する広い庭は杉山ビルの敷地内にあるのだ。

植込みは、十三の表通りとはまったく異なる静かな裏通りとビルの敷地内とを明確に隔てるためのもので、ほとんどは枯れかけている。

その枯れかけた植込みに大きなベニヤ板が吊るしてあつて「ここで立ち小便厳禁。無断で立ち入った者は厳罰に処す。管理人」とマジックインキで書いてある。

庭には葉をすべて落としたりしたハナミズキとヤマボウシの木が一本ずつと、淀川の堤の手前にある道路側のコンクリート塀の手前に何も植えていない畑らしきものがある。

杉山ビル自体は骨董品ともいふべき古い三階建てにすぎないが、敷地は想像していても広い。

建てられたのは昭和十六年十月。当時の持主は株で財を成した人物。ビルの設計は戦争前まで神戸に居住していた英国人。ここにビルを建てた目的は、外国語を教える学校を開設するためだったが、施主である杉山轍太郎氏は、まさかビルの落成から二カ月後に日本軍が真珠湾を攻撃するなどとは想像もしていなかった。戦後すぐに、占領軍は焼け野原となった大阪の街で奇跡的に残ったビルで使えそうなものを選別して接收し、自分たちのさまざまな任務遂行のため利用したが、杉山ビルも当初そのひとつで、損傷を受けた箇所を修理し、ビル内の下水道も整備しなおされたが何等かの事情で使われることはなかった……。

杉山ビルそのものについての知識はそれだけだが、玄関の造りは確かに予備知識から私が抱いていた印象を裏切るものではなく、広い玄関前には三段の石造りの階段が設けられ、玄関横には「杉山ビルヂング」と彫られた銘板が嵌め込まれている。

字のほとんどに緑色の錆が吹き出ているが、よく見ると、かつてはそれが金属部分が浮きあがる形で造られたものだと思われる。

大阪市内の、昭和二十年一月三日に始まった米軍による空襲は、七回の大空襲を含



めて計三十三回に及んだというが、この「杉山ビルヂング」という銘板はまったく損傷を受けなかったのであろう。

それは玄関側とビルの東側の外壁も同じで、大きさが均一な粗い砂を丹念に吹きつけた壁は一階から三階までくすんだ薄茶色が年月による汚れを寄せつけていない。

汚れや風化に耐えられる外壁の塗りを、専門用語で何というのか、私にはわからない。

ビルは、見あげると到底三階建てとは思えない。各フロアの丈が高いのであろう。

昨今の天井の低いビルなら六階建てに匹敵する高さだ。

私は昭和二十一年生まれの四十七歳。戦後一年たつて生まれたのだから、米軍のB29爆撃機による空襲を体験してはいないが、焦土と化した東京や大阪の街のありさまは、テレビのドキュメンタリー番組でも、戦後を記録する写真集でも幾度か目にして  
いる。

それらから推測しただけでも、この杉山ビルが、淀川に面した南側の半分しか被害を受けなかったのは、おそらく奇跡に近かったのであるろうと思われる。しかし、現在も使用に耐えていられるのは、占領軍による修理の恩恵も被ったということになりそう  
うだ。